

金田一京助記録「ユーカラ・ノート」における鍋沢コポアヌ口述のエゾイタチ (upas cironnup) に関する散文説話 2 編

藤田護

キーワード：アイヌ語、鍋沢コポアヌ、口承文学、散文説話

1. 資料とその特徴

本稿では、鍋沢コポアヌが口述し、金田一京助が記録したエゾイタチ (upas cironnup、雪狐) についての散文説話を翻刻し、原文対訳で読めるようにすることを目的としている。

金成マツが金田一京助宛に筆録したノートにおける、エゾイタチの散文説話については、昨年に原文対訳を刊行したが (藤田 2024)、この物語の沙流川流域での類話が、金田一京助が記録したノート (「金田一京助フィールドノート」) の中に見える。本稿では、より容易に両者のテキストにアクセスし、比較対照ができるように、この沙流川流域の鍋沢コポアヌが口述した原記録を翻刻・校訂し、現代表記のアイヌ語テキストとその日本語訳とともに読めるようにする。金田一京助は沙流川流域でアイヌ語の物語を数多く記録してきているが、公刊されているのは鍋沢ワカルパの「虎杖丸 (kutu ne sirka)」や「葦丸 (sup ne sirka)」などの幾つかの英雄叙事詩と、「ユーカラ概説」における幾つかの歌や神話などに限られ、また公刊されているものについても、現代とは異なるアイヌ語のローマ字表記が用いられ、日本語訳も文語体であるため、現代のアイヌ語学習者にとっては必ずしも使いやすい形ではない。本稿が、そのような状況を改善する取り組みの一環となればと思う。

この物語の語り手は鍋沢コポアヌで、同氏は沙流川流域における金田一京助の記録において重要な存在感をもつ。金田一京助はこの物語を (1) 大正 8 年 (1919 年) 12 月に一度、そして、(2) 大正 14 年 (1925 年) 8 月にもう一度記録している。同じ物語を二度記録しているのはどうも珍しいようだが、なぜそのような展開になったのかはよく分からない。(2) の方が物語の展開として、より完全なバージョンであるとも考えうるが、特に魔物イワボソインカラについての描写は (1) の方が詳しい。また、(1) については金田一京助が目次にカムイユカラであると書いているが、実際の記録を見るとサケへも記録されておらず、テキストが韻文として音節数を一定に分割できそうでもない。双方の記録をジャンルとしてカムイの散文説話であると考えてよいであろう。

金田一京助がのこしたノート記録には、北海道立図書館北方資料室に所蔵されている「金田一京助採録ユーカラ・ノート」および、千葉大学文学部ユーラシア言語文化専攻に所蔵されている「金田一京助スクラップブック」がある (後者については欠ヶ端 2020 を参照)。「金田一京助採録ユーカラ・ノート」においては、(1) が HM423 で (2) が HM419 にある。「金田一京助スクラップブック」で

は(1)がM-15で(2)がM-75に、そして(1)がP-16で(2)がP-84にある。それぞれの画質が粗いため、アイヌ語の記録は読めるにしても、特に金田一京助が欄外に小さな文字で記している様々な注釈的書き込みを判読するのが極めて困難である。しかし、両者の記録を照合することでやや判別しやすくなる部分は確実にあるため、本稿ではそのように翻刻テキストを作成し、可能な限り金田一京助による書き込みを読み取ろうとした。今後、北海道立図書館北方資料室所蔵の金田一京助採録ユーカラ・ノートが、より画質の良い写真でデジタル公開されるならば、判読可能性はさらに高まると思われ、アイヌ語についての知見の拡充に資するであろう。

物語として、既刊の金成マツによるバージョンと、ここでの鍋沢コポアヌによるバージョンを比べたときに、以下のような違いが判別できるであろう――

(1) 主人公のエゾイタチ(雪狐)のカムイが飢饉を救いに行く相手として、幌別の金成マツのバージョンで出てくるのは狼の兄弟だが、鍋沢コポアヌのバージョンで出てくるのは狼と熊のカムイのペアである。いずれにしても蛇が怖いという設定になっている。

(2) 飢饉を引き起こしている魔物としては、金成マツのバージョンでは、鹿にキナポソインカラ(Kinaposoinkar)が、鮭にペポソインカラ(Peposoinkar)がついているのであるが、鍋沢コポアヌのバージョンでは、鹿しかなく、その鹿にイワポソインカラ(Iwaposoinkar)がついている。

(3) 金成マツのバージョンでは、カムイの村と人間の村(ウラシベツ)が並行して飢饉になっていることが説明され、主人公のエゾイタチはカムイたちの飢饉だけでなく、人間たちの飢饉も解決してウラシベツの村長から感謝されている。一方で、鍋沢コポアヌのバージョンでは、カムイの村だけが飢饉になっており、人間との関わりは人間から酒やイナウが送られてくるという間接的な関係のみが言及されている。

(4) 金成マツのバージョンでは、エゾイタチのカムイが狼の兄弟の妹に対して困らせる悪戯を連発し、そこでの心理描写が詳しいが、鍋沢コポアヌのバージョンの方が、悪戯がよりシンプルな構造をしており、表現がより簡素である。

(5) 飢饉に苦しむカムイたちの村で、妹が煮炊きをする場面において、金成マツのバージョンでは、半分が紅く半分が白い穀物の粒を一粒、火打石入れから出して鍋に入れることで、飯が増殖していくが、鍋沢コポアヌのバージョンでは、ボロ布の切れ端を鍋に入れることで干し魚が増殖し、蚤をつまんで投げ入れると、鍋一杯の半分は白く、半分は紅い米の飯になる。(金成マツのバージョンでは、干し魚については狼のカムイの妹が食べてしまうだけで、増殖はしない。)

(6) 金成マツのバージョンでは、エゾイタチのカムイが狼の妹のカムイに想いを寄せ、結婚するが、鍋沢コポアヌのバージョンでは、熊の妹のカムイとのあいだで特に婚姻に向かうような物語展開はない。

以上をみると、総じて金成マツのバージョンの方が、鍋沢コポアヌのバージョンよりも物語の各所

が複雑であり、描写も詳しいが、同時にそれぞれでエスノグラフィックな（民族誌的な）ディテールの部分で差異が生まれており、地域ごとの文化的差異の生成という観点からも興味深い。

両者の語りに共通する点としては、主人公のエゾイタチ（雪狐）のカムイが、（１）すばしこく神出鬼没で存在自体を他に知られていないという設定、また、（２）巫術によって相手のカムイを操る能力をもっていたり、（３）カムイの村において食糧を増やすような特別なアイテムをもっていたりなど、カムイとしてもっている属性は共通していると言えよう。また、あくまでカムイの世界における飢饉の解決と、カムイ同士の相互交渉が物語の主眼にあり、人間の世界は並行して存在しているが、間接的なかたちでしか出てこないという、物語の舞台設定も両方で共通していると言えるだろう。鍋沢コボアヌのバージョンは簡素ではあるが、人間の世界の方の動向、カムイ同士の結婚、そしてカムイたちに対するエゾイタチの悪戯などは、物語を膨らませていけばよいわけで、語りの簡素さが物語の骨格に影響するような点はないと言えそうだ。

2. ものがたり

（１）私は他の者たちに気づかれないカムイである。熊と狼のカムイがともに村を守って暮らしていて、熊と狼が常に人間から酒やイナウを多く贈られ、酒宴を常に催していることを、私は羨ましく思う。

すると、カムイの村が飢饉になり、山猟に行っても小さな鹿すら獲れず、皆が死にそうになっている。

私は熊のカムイと狼のカムイを念力で狩りに行かせ、尾根から鹿を追い出させる。すると、その群れの先端にイワボソインカラがつき、群れの中にも末尾にもそれぞれイワボソインカラがついている。私はヨモギの矢で先頭のイワボソインカラの目を射て、他のイワボソインカラも射て、続いてそれらの鹿を全て射殺す。そこに狼のカムイも熊のカムイも来て、喜んで鹿の皮剥ぎをする。

私は先に山を下り、このカムイたちが最も恐れる蛇に姿を変えて頭を突つつく。カムイたちは、声を上げ、荷物を放り捨てて家に逃げ帰り〈何のカムイが悪戯をするのか〉と思い、腹を立てる。私は、自分の念力で鹿を家まで下ろし、熊と狼のカムイにそれを見せると、喜んでオンカミ（拝礼）をしながら、「誰が助けてくれたのか」と言いつつ、皮剥ぎを毎日して、[カムイの] 村人たちに配ると、村も飢饉から回復する。

助けたのが自分であることを私が知らせると、熊と狼のカムイが「自分たちの近くにそれほどの位の重いカムイがいたとは」と驚き、それからは人間の酒や人間のイナウが私のところにも運び込まれ、自分もカムイとなっているのだと、エゾイタチ（雪狐）のカムイが言う。

（２）私は他の者たちに気づかれないカムイである。熊のカムイと狼のカムイが隣り合って暮らし、人間の酒やイナウをいつも受け取って酒宴を開いていて、私はそれを羨ましいと思うが、招か

れることもない。

いつの頃からか、カムイの村が飢饉となり、食べ物もなく、狼のカムイも熊のカムイも山猟に行っても小さな鹿すら獲れなくなっている。

ある日のこと、熊のカムイの所に私は行って訪いの咳ばらいをすると、熊のカムイの妹がそれを見て家に入り、私に来ていることを告げると、熊のカムイが「食べ物が無くても入れてあげなさい」と言い、私はボロ布をさげて家に入る。

その女性〔熊のカムイの妹〕が何を煮炊きしようかと考えていると、私は念力で大鍋を炉にかけさせ、女性は訳が分からず泣いているが、鍋が煮立って、私はボロ布や自分の着物の切れ端を入れ、かつ他の者たちの目に息を吹きかけ、目くらましをかけると、鍋一杯の干し魚が煮える。喜んでその女性が食べ物を配り、私たちはそれを食べる。また私は念力で女性に大鍋をかけさせると、女性はまた泣いているが、私が自分の着物についた蚤をつまんで入れ、かつ他の者たちの目に息を吹きかけ、目くらましをかけると、半分は白い米の飯、半分は紅い米の飯が鍋一杯に炊き上がる。皆が喜び、娘がそれを配り、私たちは食べる。

翌朝に狼のカムイとクマのカムイを連れて山猟に行くと、尾根の末端に鹿がいて、それらを追って群れを走らせると、群れの先頭と中ほどに〔魔物である〕イワボソインカラがいて、それでカムイたちが猟で獲物がとれなくなっていたのであった。私は一本の蓬の棒を折り、イワボソインカラたちの目を射って、六重の地底の世界に踏み落とす。

私は鹿も射て全て殺すと、尾根の下手にそれが積み上がり、カムイたちがそこに下りてきて喜び、皮剥ぎをする。私は先に山を下りて、道の上に傾いた木の上で青大将に姿を変え、戻ってきたカムイたちの頭の上を突つきすると、カムイたちは驚いて荷物を捨て、家へ逃げ帰る。カムイたちが腹を立てているので、私はカムイたちが捨てた荷物も念術で神窓のところへと下ろし、窓を通してカムイたちに様子を見せると、カムイたちは喜んで鹿の皮剥ぎをし、カムイの村は復興する。

そして正体が私であることを分かせると、カムイたちはそのような位の高いカムイが近所にいたことに大いに驚き、人間の酒やイナウが来ると、私を招いて分け前をくれるようになり、私はそれで自分をカムイとしているのだと、エゾイタチが話す。

3. 翻刻・現代表記・原文対訳

留意点

原ノートにおける改行は、半角の「/」で示している。原ノートではページ番号が振っていないので、それぞれの物語の冒頭のページを「1」として、ノートのページごとに原ノートの翻刻、現代表記にしたアイヌ語テキスト、およびその日本語への翻訳を示した。現代表記については、ここまで千葉大学の各種刊行物で用いられた表記方法を踏襲している。翻刻については厳密にページに従っ

て記しているが、現代表記と翻訳については、ページをまたぐことで理解が困難になるとと思われる語句のつながりについては、前のページか後ろのページに移し、まとめた。現代表記と翻訳については、後の整理の便宜を考え、ページ数とそのページ内の行番号を組み合わせた行番号をそれぞれ振ってある。訳の方針については、【カワウソ私に化ける2】を参照されたい。なお、発言については「」で括ったが、心内語として独立している内容の場合には〈〉で括るという工夫を試みている。

(1)

p.1

【原ノート翻刻】

Aukoe¹ irameunin² kamui anehine / anan. Nupuri koro kamui Hor keu kamui / shoikeheta³
 ukokotan koro wa okahike / ainu tonoto ainu inau shenne(¿?) neita⁴ / eshóchuppa⁵ koro kamui
 opitta tak wa / ikú hawe ipé hawe aeikoitupa⁶ koro anan, / peneakusu, kamui kotan kemush ine, / ep
 ka isampa, keshto ankoro ekimne rok⁷ / ekimmerok hikeka poi yuk po ka / eomkempoaka⁸ (aine)⁹
 ep ka isam rok hine, / tane rainoine oka, hikusu shine anta / ramu¹⁰ anani aekimne repa shitukeshta /
 nupurikorkamui horkeukamui yukokewe / topapash shiri ene ani, -- hoshkinopo / iwáposoinkara¹¹

¹ ページの上の方に「皆オボエテルケレド 何カクレルトキ ソノ人ニダケ／クレナイデ 皆ガクレルトキ イツ 忘レラレル／キタノモシラスニキル」との書き込みがある。これはこのエゾイタチ（雪狐）のカムイのことを言っているのであろう。

² 上に「イタノモワカラナイ神サマニナツテキタ」との書き込みがある。

³ 左に「トナリニ」との書き込みがある。

⁴ 右に「イツモ サケ… (?) ヲ神来レバ／神ダチト共ニ食ツテモ／ヨブモシナイ」との書き込みがある。

⁵ この単語の上に「*」の印があり、ページの上に「eshochupu 客食ラヒテ舞フ、 筵ヲシマフ」と書かれている。

⁶ 右上に「コノマシガル」との書き込みがある。

⁷ 右側に「狼ダノ熊／ダノ山へ／行ツテモ何モ／トラナイ」との書き込みがある。

⁸ 先に eomkenpoka と書かれ、後から po の o が a に修正されている。また、この単語の上に「トレナクナル」との書き込みが、左側に「何モ／ミアタラス」との書き込みがある。

ここでは「*」の印がつけられていないが、ページの上で「eomken 捕ル能ハズ 漁 (?) セス」との書き込みがある。

⁹ 後から「(aine)」と上に付け加えられている。

¹⁰ この左横に「考ヘタ」との書き込みがある。

¹¹ この単語の上に「*」の印があり、左に「バケモノ／ヤハリ／虎ノヤウナ形デ／光ッタ／大キナ／目、出テ／ツキ出ル／目、ソレ／アルト／ケカチニ／ナル、／ソレガ (?) 出ル事ヲ (?) ケカチ、／鹿ノサキニ立ツテ走ル コレガ命令シテサキニ立ツテハセルト鹿ソノ通りハセルカラ熊狼等

utarehoshki sekotterke yan / sekoro hawe an koro, neno yuk utari ki, / topanoshkita¹² iwaposo inkara itura,¹³ / topa sarakeshta iwaposoinkar itura / hikusu, noyā ni¹⁴ hoshkino sampe¹⁵, shik-aotke¹⁶

【現代表記・対訳】

- 0101 a=ukoeramewnin¹⁷ kamuy a=ne hine an=an.
他の皆に気づかれないでいるカムイで私はあって暮している。
- 0102 nupuri kor kamuy horkew kamuy soykehe ta ukokotankor wa oka hike
クマのカムイとオオカミのカムイが、隣とともに村を守って暮しているところ、
- 0103 aynu tonoto aynu inaw senne¹⁸ ney ta esocupu kor¹⁹
人間の酒や人間のイナウで、一時も莫塵をまくる（酒宴をお開きにする）ことにならず
- 0104 kamuy opitta tak wa iku hawe ipe hawe
カムイを皆招待して酒を飲む話、食事をするという話を
- 0105 a=eikoytupa kor an=an pe ne akusu,
私は羨ましいと思いがらいるのであったところ、
- 0106 kamuy kotan kemus h_ine ep ka isam pa.
カムイの村が飢饉になり食べ物もない。
- 0107 kes to an kor ekimne rok ekimne rok hikeka
毎日山猟に行き、山猟に行きしても
- 0108 pon_ yukpo ka comken pa ayne ep ka isam rok hine,
小さな鹿も獲れずにいたあげくに、食べ物もなくなって

ガノ鹿ヲトレナイ 追フモカ、ルモノ魚ノ形シテモ（？）目飛出シテ光ル故ワカル。目玉外へ出テル」との書き込みがある。なお「けかち」とは飢饉のことである。

¹² 上に「マンナカニモ来タ」との書き込みがある。

¹³ 右側に「カタッテ来タ」との書き込みがある。

¹⁴ 上に「ヨモギヲ」との書き込みがある。

¹⁵ 上に「先ニ下リタノヲ」との書き込みがある。

¹⁶ 上に「目ツキコロス」との書き込みがある。

¹⁷ 原ノートに従うともう一つiが入ることになるが、沙流地域で他でも記録されているのは ukoeramewnin という形であり、同じ話者がもう一つの物語でも ukoeramewnin という語形を用いているので、ここも同じ語形であろうと判断した。

¹⁸ senne は沙流地域においてそれほど記録された用例が多くなく、韻文で senne ohewke 「まっすぐに」や senne moyo 「少なくない」の用例が複数見えるくらいである。ここで、そのような定型表現でなく用いられているのは興味深い。

¹⁹ 人間のくにからの贈り物がひっきりなしに到来していたということ。

- 0109 tane ray noyne oka hi kusu
今や死にそうになっているので、
- 0110 sine an ta ramuan=*an h_i*²⁰ a=*ekimnere pa situ kes ta*
あるとき私が念じることで、[熊と狼のカムイを] 山獵に行かせ尾根の先の所で
- 0111 nupuri kor kamuy horkew kamuy yuk okewe topa pas siri ene an h_i:
熊のカムイと狼のカムイが鹿を追い出し、その群れが走る様子がこうである――
- 0112 hoskinopo Iwaposoinkar utarehoski
最初にイワボソインカラが先頭に立ち
- 0113 “*se*²¹ kor₋terke yan”
「背負って走ってくれ」
- 0114 sekor hawean kor
と言うと
- 0115 neno yuk utari ki topa noski ta Iwaposoinkar itura
そのように鹿たちがし、群れの真ん中にイワボソインカラを連れ、
- 0116 topa sarkes ta Iwaposoinkar itura hi kusu,²²
群れの末尾にイワボソインカラを連れているので、
- 0117 noya ani hoskino san pe sik²³ a=*otke*.
ヨモギでもって先に下りてくるものの目を私は突く。

p.2

²⁰ この語りにおいては、この表現が主人公の行為に関して頻出する。この言葉を字義通りに受け止めるならば、このエゾイタチ（雪狐）のカムイは心で思うだけで他のカムイたちを動かす力をもっていることになり、たいへん力の強いカムイであることになるだろう。

なお、ここの表現をとりあえず *ramuan=an h_i* ととっているが、これが *ramuan ani* である可能性もあるかもしれない。*ramu* は他動詞であるから、*ramu=an ani* という可能性は考えづらい。かかる意味で、この表現の語形が決定できていない。

²¹ *se* は背負う対象を目的語にとる 2 項動詞なので、ここで「自分を」を示す 4 人称目的語人称接辞 *i=* がついていないことは興味深い。

²² 鹿の群れの先頭と真ん中と末尾にイワボソインカラがいるということは、イワボソインカラは全部で 3 体存在していることになる。

²³ これは鹿の群れの先頭を走ってくるイワボソインカラの目なので、所属形の *siki* になりそうな気もするが、そうっていないことは興味深い。原ノートで *shik-aotke* とハイフンで後ろと繋がれて書かれており、何かこれで一体の表現であるように話者が認識して発話していた可能性があるだろうか。

【原ノート翻刻】

orowa²⁴ no nea topa achotcha aine / topa noshketa iwaposoinkar / sekot tereke yan sekoro hawe an koro / shikihi²⁵ achotcha orowano sui / nea yukachotcha aine, opitta achotcha / shitukeshta? yukopitta rai ruwene. / orota horokeukamui ka ran²⁶ / nupurikorokamui ka ek wa ukoyaiko- / puntok²⁷, irishiri anukara koro sanan / ekimne rutomta ruenka un hotkuchikuni²⁸ / kashita anan yuk se hine saphi²⁹ / kusu³⁰, pakno kinaoroshitoma³¹ utara / isampe nehi kusu shikinashutunkuru / ne yaikaran hine ichoropok³² hike, kushita³³ / sapaha o ochiuochiu³⁴. inukara ap³⁵ / opitta no hum she tura³⁶ shike oshuru³⁷ / patek hine sap ruwene. wenirushka / koro unita ahup ene an erusui rokpe³⁸ / araike wa ashe humi ne kunak aramu / ap nep kamui ene ramkoiki an sekoro / yainu kusu³⁹, irushkawaoka kusu

²⁴ ページの上方に「tokkoni 小サイ/shi kinashut un kuru 青大将 (大キイノ) イノ方ノヘビ。」との書き込みがある。

²⁵ 左に「熊ダノ狼ホド/ヘビコハガル/モノナシ」との書き込みがある。

²⁶ 先に kara ran と書かれ、これを消して上に ka ran と書き直されている。

右側に「ソコヘ下リテ来タ」との書き込みがある。

²⁷ 左に「カワハイデルノ/ヲミテサキニ/来タ」との書き込みがある。

²⁸ 上に「道ノ上ヘ サンカクブイテ (?、以下3文字ほど判読不能)」との書き込みがある。

²⁹ 上に「下ッテキタ」との書き込みがある。

また、右に「狼モ熊モ X シガッテ来 (?)」との書き込みがある。

³⁰ 左側に「蛇/kina sutoun-/kuru/X Xアレバ、アル/モノヘビダカラ/「kinaoro/shitoma」/ト蛇ヲイフ/大キナ太イヘビ/青大将/ニカラダヲカヘテ/熊ノ頭サ/マキツイテ/神(?) ミナミテカラ/ビックリシテ/ニモツモオイテ/ニゲタ」との書き込みがある。

³¹ kinaoro の部分に下線が引かれ、上に「ヘビオカナイ」との書き込みがある。「オカナイ」は「おっかない」のことか?

また、この単語からノート上方に向けて線が引かれ、「kinaorunpe トモイフ/ヘビノヲ」との書き込みがある。(「ヲ」は「事」)

³² 上に「僕ノ下」との書き込みがある。

³³ 上に「トキ 下ヲ/通ル」との書き込みがある。

³⁴ 上に「ツツク」との書き込みがある。

³⁵ 右に「アタマヘ/イタヅラ/シタ」との書き込みがある。

³⁶ 上に「フム! トビックリノ大キナ声出シ下ル」との書き込みがある。

³⁷ 右上に「ニモツナゲテ」との書き込みがある。

³⁸ 右に「アンナニ/クヒタ/カリテモ/シ X リテ/キタト/思ツ/ヨロコ/Xダ X/XX/イタヅラシテ/ナド XXX ベト/怒(?) ル」との書き込みがある。ただし、文字が潰れていて、翻刻している箇所にも誤りがあるかもしれない。

³⁹ この行の左下に「アマリ蛇オッカナガルノ オモシロガッテ 冗談シタ」との書き込みがある

【現代表記・対訳】

- 0201 orowano nea topa a=cotca ayne
それからその群れを私は射たあげくに
- 0202 topa noske ta Iwaposoinkar
群れの中ほどでイワボソインカラが
- 0203 “se kor_ terke yan”
「背負って走ってくれ」
- 0204 sekor hawean kor sikih i a=cotca.
と言うと、その眼を私は射る。
- 0205 orowano suy nea yuk a=cotca ayne, opitta a=cotca.
それからまたその鹿を私は射たあげくに、全てを私は射る。
- 0206 situ kes ta yuk opitta ray ruwe ne.⁴⁰
尾根の先で鹿が全て死ぬのだ。
- 0207 oro ta horokew kamuy ka ran, nupuri kor kamuy ka ek wa ukoyaykopuntek
そこに狼のカムイも来て、熊のカムイも来て共に喜び、
- 0208 iri siri a=nukar kor san=an.
皮剥ぎをする様子を私は見ながら山を下る。
- 0209 ekimne ru tom ta ru enka un hotku cikuni kasi ta an=an.
山猟に行く道の途中で道の上へと屈む木の上に私はいる。
- 0210 yuk se hine sap hi kusu,
[狼と熊のカムイが] 鹿を背負って下りてくるので
- 0211 pakno kinaoro⁴¹ sitoma utar isam pe ne hi kusu
それ以上に蛇を恐れる者たちはいないものであるから
- 0212 sikinasutunkur ne yaykar=an hine
蛇に私は姿を変えて
- 0213 i=corpok hike⁴² kus hi ta sapaha a=ociwociw. i=nukar a p

⁴⁰ 0112 行目以降を参考にすると、イワボソインカラがここには3体存在し、群れの先頭、真ん中、末端についているようだ。なので、途中から末端につくイワボソインカラに下りが省略されて語られているのかもしれない。

⁴¹ この語形は管見の限り他に記録が見えないが、金田一京助の書き込みからすると kinasutunkur の同義語で「へび」を指す単語であるようだ。

⁴² 位置名詞の長形 i=corpokike の語尾が hike として分離しているような形か。この単語については特に他に同種の用例は見えない。

私の下を通るときにその頭を私は突つき突つきする。私を見たのだが、

0214 opittano humse tura sike osurpa tek⁴³ hine sap ruwe ne.

皆が「フム！」という声を上げながら背負いひたすら荷を捨てて山を下りるのだ。

0215 wen iruska kor uni ta ahup.

ひどく腹を立てながら [狼と熊のカムイが] 家へと入る。

0216 enean e rusuy rok pe a=rayke⁴⁴ wa a=se humi ne kunak a=ramu a p

そのように好物 [の鹿] が殺されて私たちは背負っているのだと思っていたのに、

0217 <nep kamuye⁴⁵ ene ramkoyki=an?>

〈何のカムイがそのように悪戯をするのだ〉

0218 sekor yaynu kusu, iruska wa oka kusu

と思うので、腹を立てているので、

p.3

【原ノート翻刻】

ramu an ani ne rok yuk opitta inau⁴⁶ / chipa chiseukouturu⁴⁷ ke un aranke aranke a / okake an koro
ramu anani iramno / nupurikoro kamui ka horkeu kamui ka / ahopunpare hine puyarakari ainkare⁴⁸ /
eyaikopuntek onkami rok onkami rok / nep pitoho ikaopiuki ruwe ene ani an / sekoro hawe oka koro

⁴³ 原ノートには oshuru とあり、ということは、ノートの次の行の pa と併せて、osura の複数形 osurpa ではないかと考える（この点は阪口諒氏からの示唆を得た）。

⁴⁴ この行では 4 人称の主語が連続するが、物語の筋を厳密にたどるなら、この最初の 4 人称は熊と狼のカムイが自分たちで殺しているわけではないので、「人が」と不定人称になっており、次の 4 人称から自分たちのことを指していると考えられるか。

⁴⁵ 金田一京助は kamui とのみ記しているが、nep の後ろは所属形になると考えられ、後ろが ene なので所属形の語尾を聞き落としたのではないだろうか。ただし、後ろにも nep kamui という形が出てきて、そこは後ろが e の音ではないが所属形になっていない。ただし、pito は nep pitoho と所属形の長形で使われている。

⁴⁶ 右に「イタハシガリテ怒ッ／テルカラ／自分ノ思ヒデ／鹿ヲミナ／家ノ／ヌサ／アッタソノ／間へ皆／ヨコシテ／オイタ」との書き込みがある。

⁴⁷ 先に chi-kouturu と書かれ、後から se と u が上に挿入されている。また、この単語からノートのページ上部に線が引かれ、そこに「chise-uko-uturuke 熊ト狼トノ／家ト家トノ間」との書き込みがある。

⁴⁸ 原ノートでは、この右の余白に「大 X ダナ X / X ルカナト / 思ハセテ / 家ノ外ミカケ / ソクサニ (?) アツタカ / ラソレカラ XX / ス」との書き込みがある。

keshto iri rok⁴⁹ / iri rok utari opitta eimek kara wa / kotanu hepuni⁵⁰ ruwe ne. orowano / nep kamui
 ika opiuki kusu kusu keraipo / shiknuan shiri oka sekoro yainu / koroka pase kamui utara ohonno⁵¹ /
 ashierampeutekka ka eoripak kusu⁵² / ashinuma nehi aeramuan ka orowano / ene an pase kamui
 isamta anike⁵³ / aeramishkarino araketa ikix(??) an / aani an sekoro hawe oka koro orowano anak ne
 / ainu inau ainu tonoto hoshkino / aieahunke inau imeki aikore wa⁵⁴ / aiyaikamui nere ruwe ne sekoro
 upash / chironnup kamui hawe an.

【現代表記・対訳】

- 0301 ramuan=an h_i
 私が念じることで、
- 0302 nerok yuk opitta inawcipa cise ukouturuke un
 それらの鹿をみな幣棚と家のあいだへ
- 0303 a=ranke⁵⁵ a=ranke a okake an kor
 私は下ろして下ろしてそれが終わると
- 0304 ramuan=an h_i iramno nupuri kor kamuy ka horkew kamui ka
 私が念じることで、一緒に熊のカムイも狼のカムイも
- 0305 a=hopunpare hine puyar kari a=inkare
 私が起こして窓から外を見せると、
- 0306 eyaykopuntek onkami rok onkami rok
 そのことに喜んでオンカミ（拝礼）をしてして
- 0307 “nep pito⁵⁶ i=ka opiwki ruwe ene an h_i an”
 「何のカムイが私たちをこのように助けてくださるのでしょうか」

⁴⁹ 原ノートでは、この右に「革ハグ」との書き込みがある。

⁵⁰ 原ノートでは、この上に「ナホル」との書き込みがある。

⁵¹ 原ノートでは、この右に「永ク」との書き込みがある。

⁵² 原ノートでは、この右の余白に「ドコマデワシノコ／オシヘズニキタノ／キノドクダト／オボエラレタ」との書き込みがある。

⁵³ 原ノートでは、この右の余白に「コンナニ位ノ大キイ／神（？）ノアルノ／今マデシラナ／カツタナ」との書き込みがある。

⁵⁴ 原ノートでは、この右の余白に「ソノ X ミナ自分ノ／村ノ人ニ分ケテ／X ツテ XX ノ人／シナクッテイキタ」との書き込みがある。

⁵⁵ ここでは原ノートの記載に従うが、すぐ後ろに4人称主語の人称接辞 a=があることから、実際には助動詞の a が発音されていたが気づかれなかった可能性もあるかもしれない。

⁵⁶ 金成マツ氏が散文説話で pito を用いる場合は「人間」の意味で用いられるが、ここでは「カムイ」の意味で用いられていると考えてよさそうだ。

- 0308 sekor haweoka kor kes to iri rok iri rok.
 と言いながら毎日皮剥ぎをし、皮剥ぎをする。
- 0309 utari opitta eimekkar wa kotanu hepuni ruwe ne⁵⁷. orowano
 彼らの〔熊と狼のカムイの〕村人たちにも皆配って、その村は回復するのだ。それから
- 0310 <nep kamuy (kamuye?)⁵⁸ i=ka opiwki kusu
 〈何のカムイが私たちを助けてくれて、
- 0311 kusukeraypo siknu=an siri oka?>
 そのおかげで私たちは生き延びられたのだろうか〉
- 0312 sekor yaynu korka
 と思うけれども
- 0313 pase kamuy utar ohonno a=sierampewtekka ka eoripak kusu
 位の重いカムイたちを長いあいだ訳が分からないままにさせるのも申し訳ないから
- 0314 asinuma ne hi a=eramuanka. orowano
 私であることを私は知らせる。それから
- 0315 “enean pase kamui i=sam ta an aan h_ike a=eramiskari no
 「そのように位の重いカムイが私たちの傍にいたのであったことを知らずに
- 0316 arke ta iki=an aan h_i an”
 一方でこのようにしていたことであった」
- 0317 sekor haweoka kor
 と〔熊と狼のカムイが〕言いながら
- 0318 orowano anakne aynu inaw aynu tonoto hoskino a=i=eahunke
 それからは人間のイナウ、人間の酒を先に私の所に運び込んで、
- 0319 inaw imeki a=i=kore wa a=i=yaykamuyneru ruwe ne
 イナウの土産を私にくれて、私をカムイにしてくれているのだ
- 0320 sekor upascironnup kamuy hawean.
 とエゾイタチ（雪狐）のカムイが言う。

(2)

⁵⁷ ここで復興しているのはカムイたちの村であり、具体的には述べられていないが人間の村も並行して復興しており、その結果末尾で人間たちからも感謝の贈り物が送られてきているのであろう。

⁵⁸ 疑問詞の後ろにくる名詞は所属形になるとも考えられ、上にも nep pitoho という表現があるが、ここは原ノートでは kamui となっており、概念形になっているように見える。

p.1

【原ノート翻刻】

kamui uwepekere

aekoerameunin⁵⁹ kamui ane hine / anan nupurikoro kamui horokeu / kamui usoi uiru⁶⁰ wa ainu tonoto / ainu inau ramma uinawa / eukotonoto koro aeikoitupa koroka / itakpa ka somo ki hine shiran / pene akusu hemtomaniwano / kamui kotan kemushine aep ka / isam. orowano hor keu kamui ka / nupuri kor kamui ka ekimneroki / ekimne⁶¹ roki poiuyukpo ka eomkempa. / aine tane shino yaiwennukar / ruwe ne koro shine anta nupuri kor / kamui orota arpaanine shimushish- / ka an. akusu tureshihi soine / inukare hine orowa ahun. / ekanine haweash nupurikor / kamui⁶² yanto koro an yakka / asuwep ka isam. hene ki ap kusun / ahuprusui⁶³ kusu ariki utara somo / ahupte hawe! sekoro hawean haweash

【現代表記・対訳】

0100 kamuy uepeker

カムイのウエペケレ [見出し]

0101 a=ekoeramewnin kamuy a=ne hine an=an.

私は他の皆に気づかれないカムイであって暮らしている。

0102 nupuri kor kamuy horkew kamuy usoyuyru⁶⁴ wa

クマのカムイとオオカミのカムイが隣り合って暮らしていて

0103 aynu tonoto aynu inaw ramma uyna wa

人間の酒や人間のイナウをいつも受け取って

0104 eukotonotokor⁶⁵ a=eikoytupa korka

それで皆で酒宴を開いていて、私はそれを羨ましいと思うけれど、

0105 i=tak pa ka somo ki hine siran pe ne akusu

⁵⁹ この単語の上に「みタノモシラズニキル神ニナツタ」との書き込みがある。

⁶⁰ この上に「ヂキトナリ」との書き込みがある。

⁶¹ この行の左に「鹿(?) トル/鹿(?) ハドコ/マデモ鹿(?) ナラン/トイフ」との書き込みがある。

⁶² この行の左に「御(?) 客アツテ/モ/食フモノモナイ」との書き込みがある。

⁶³ この行の左に「ハイラントソクル/人イレナクテハ/ナラナイ」との書き込みがある。

⁶⁴ soyuyru「外ニアル、外ニハミ出テキル、外ニムキ出シニシテキル」【久保寺辞典稿】p.307。

⁶⁵ eukotonotokor < e-uko-tonoto-kor「~でもって・互いに/一緒に・酒・~をもつ」であろう。管見の限り他にこの単語の用例は見つからないが、その後の tak「招く」という文脈から酒宴を開いていることになるのだろうと判断した。

私が招かれることもない様子であったところ、

0106 hentom ani wano kamuy kotan kemus h_ine aep ka isam.

いつのころからか、カムイの村が飢饉となって食べ物もない。

0107 orowano horkew kamuy ka nupuri kor kamuy ka

そしてオオカミのカムイもクマのカムイも

0108 ekimne rok h_i ekimne rok h_i pon_ yuk poka comkem pa ayne

山へ行き山へ行きするけれど、小さな鹿すら獲れないでいたあげくに

0109 tane sino yaywennukar ruwe ne kor

今やひどく辛いことになっているのであると

0110 sine an ta nupuri kor kamuy oro ta arpa=an h_ine simusiska=an akusu

ある日のこと、熊のカムイの所に私は行って、訪いの咳払いをしたところ

0111 turesihi soyne i=nukare(?)⁶⁶ hine orowa ahun.

その妹が外に出て来て私を見て、それから中に入る。

0112 ek=an h_i ne hawe as. nupuri kor kamuy

私が来ていると言う。クマのカムイが

0113 “yantokor=an yakka a=suwe p ka isam hene ki a p kusun⁶⁷

「客が来ているのに私たちが煮炊きするものがなかったので

0114 ahup rusuy kusu arki utar somo ahupte hawe!”

家に入りたくてやってくる者たちを入れられないという話か！（入れてあげなさい）」

0115 sekor hawean hawe as.

と言う声がする。

p.2

【原ノート翻刻】

⁶⁶ どうも末尾の e が余計で i=nukar なのではないかと思われる。

⁶⁷ 沙流での他の用例として——ene wen menoko a=ne a kusu, iruska=an a p kusun, ikesuy=an wa ora ene pase kamuy poho a=kor ruwe an 「私は悪い女であったから、腹を立てたために、家出してこのように、尊い神様の息子を産んだのだなあ」【音声資料 1】 pp.32-3.

orowa⁶⁸ hetopo soenehine iahunte⁶⁹ / kusu ye △ ahunan ruwe ne / △ wenyarattushi⁷⁰
 aeoshitrashita⁷¹ hine ahun an ruwene / orowano nea menoko poka / hemanda asuwe etokush sekor /
 yainukoro an hikusu ramu an ani⁷² / poro su aattere attenisakoro orowa / eyayokapashte⁷³ asuwep ka
 isamap / hemanda asuwe kusu ene iki ani an / sekor yainu kusu chish kor an. / nea-supop⁷⁴ aine akoro
 yarattushi⁷⁵ amipi arishpa hine / suoro⁷⁶ aomare orowano unakoro / ae⁷⁷ he hi kusu ene shiriki hi an
 sekoro / nea menoko ka yupihika yainu kusu / eunno inkar hine okai kusu shikihi⁷⁸ / aewatte
 shikrappa rappa hikusu / rapokita su shikno yaetaye⁷⁹ sat chep / asuwene. Nea menoko eyaikopuntek
 kor / eimehine⁸⁰ ae ruwe ne. / Orowa kanna ramuanani poro su huraye wa atte / sui yayo kapashte.
 Hemanda aomarekusu / ene iki-anhi an sekor ramu an kusu / chish koro an nea supopi kusu⁸¹ / anu
 matushi⁸² un uruki shinep auk hine

【現代表記・対訳】

0201 orowa hetopo soyene hine i=ahunte kusu ye.

それからまた [クマのカムイの妹が] 外に出て、私に入るように言う。

⁶⁸ 原ノートでは、この行の上に「ya-etaye-satchep ホセタ魚／今デモ魚トリセバウスク割ッテ satchep ニホスモノダ／ソノヤウナ satchep ナベ一杯アッタ」との書き込みがある。

⁶⁹ 原ノートでは、先に yau と書き始められ、それが消された後に iahunte と書かれている。

⁷⁰ 原ノートでは、この1行は前ページの上の余白に書かれ、この部分に挿入する線が引かれている。同時に、前の行の kusu ye の後ろに挿入記号がつけられ、後から消されてもいる。つまりは、この行の ahunan ruwe ne は前の行の同じ表現と重なることが含意されているようで、下の現代表記の整訂された本文では、ここを併せて一つとしている。

⁷¹ 原ノートでは、この単語の下に「ボロ、下ゲテ」との書き込みがある。

⁷² 原ノートでは、この行の右から縦書きで「ボロ入レタヤウニミセル 実ハ魚」との書き込みがある。

⁷³ 原ノートでは、この単語の上に「ハットキガツカセタ」との書き込みがある。

⁷⁴ 原ノートでは、pop に下線が引かれ、その上に「ニタツ」との書き込みがある。

⁷⁵ 原ノートでは、先に aine amipi と書かれ、後から両単語の間に上に akoro yarattushi と書き足されている。

⁷⁶ 冒頭の文字が下があまり閉じていないため ru にも見えるが、ここは文脈からして su「鍋」が意図されていたのだろうと判断した。

⁷⁷ 原ノートでは、この行の左に「ドコ食フニ／アンナヲ／シタベ／ナ」との書き込みがある。

⁷⁸ 原ノートでは、この行の右に「メノコヤ／兄ノ目ヲ／フク」との書き込みがある。

⁷⁹ 原ノートでは、この部分の上に「アミヒキ」という書き込みがある。

⁸⁰ 原ノートでは、この行の左に「X様へ／ツケル」との書き込みがある。

⁸¹ 原ノートでは、supopi から下の余白に向かって線が引かれ、「pop hikusu」との書き込みがある。

⁸² 原ノートでは、この anu matushi の下に「エリノウラ」との書き込みがある。

- 0202 wen yarattus⁸³ a=eositrasitra⁸⁴ hine ahun=an ruwe ne.
ひどいボロ布を私はぶら下げぶら下げて、家に入るのだ。
- 0203 orowano nea menoko poka
それからその女性 [クマのカムイの妹] だけが
- 0204 <hemanta a=suwe etokus?>
〈何を私は煮炊きしようか〉
- 0205 sekor yaynu kor an hi kusu
と考えながらいるのだから、
- 0206 ramuan=an h_i poro su a=attere
私が心に思い浮かべることで、大きな鍋を [私は娘に] 火にかけさせ、
- 0207 atte nisa kor orowa eyayokapaste⁸⁵.
[娘は鍋を] 火にかけ終わると、それからはっと気がつく。
- 0208 <a=suwe p ka isam a p hemanta a=suwe kusu ene iki=an h_i an>
〈煮炊きする物もないのに、何を私は煮ようとこのようにしているのだろう〉
- 0209 sekor yaynu kusu cis kor an. nea su pop ayne
と考えるので泣いている。その鍋が煮立った後に
- 0210 a=kor yarattus a=mipi a=riska hine su oro a=omare orowano
私は自分のぼろきれ、自分の着物を引き裂いて鍋の中に入れ、すると、
- 0211 <(h)unak or(o)⁸⁶ a=e he hi kusu ene siriki hi an>
〈どこを我々は食べるとでもいうので、そのような様子なのか?〉
- 0212 sekor nea menoko ka yupihi ka yaynu kusu eunno inkar hine okay kusu
とその女性も兄も思うので、そちらの方を見ているので、
- 0213 sikihhi a=ewatte⁸⁷ sikrapparappa hi kusu
その目に私は息を吹きかけて、二人が瞬きを何度もしているのだ

⁸³ この単語は管見の限り他に用例が見えないが、yarpesit「ボロ布」と同様の単語であろうか。

⁸⁴ ositrasitra「ぼろぼろである、あちこち破れてぼろぼろがぶらさがっている、ぼろぼろの衣服を着ている」【沙流辞典】p.487。

⁸⁵ 金田一京助の書き込みベースで訳をつけてある。

⁸⁶ 原ノートでは unakoro であるが、金田一京助による書き込みをもとにすると、おそらく hunak or(o)ではないかと考えられる。冒頭の h を聞き漏らしたのか、発音されなかったのかは不明。

⁸⁷ この ewatte という単語は未詳だが、金田一京助がつけている「フク」という書き込みを元に訳した (ewar「～を吹く」が元になっているのではないかとの教示を阪口諒氏から得た)。

- 0214 rapoki ta su sikno yaetaye satcep⁸⁸ a=suwe (h_i)ne
そのあいだに鍋一杯まで干し魚を私は煮て、
- 0215 nea menoko eyaykopuntek kor eimek⁸⁹ hine a=e ruwe ne.
その娘が喜んで [食べ物] を配って、私たちは食べるのだ。
- 0216 orowa kanna ramuan=an h_i poro su huraye wa atte suy yayokapaste.
それから再び私は念じることで、[娘は] 大鍋を洗って火にかけ、またはっと我に返る。
- 0217 <hemanta a=omare kusu ene iki=an hi an?>
<何を私は入れようとしてこんなことをしているのか>
- 0218 sekor ramuan kus cis kor an.
と思うので泣いている。
- 0219 nea su pop h_i kusu a=numatusi un uruki sinep a=uk hine
その鍋が沸くので、私は自分の着物の襟のところにいる蚤を一匹つまんで、

p.3

【原ノート翻刻】

suorun⁹⁰ aosura orowano sui eunno / inkara hine oka hikusu shikihi / aewatte shik chupu⁹¹ chupu rapokiketa / sui su shikno kane emokoho retara / emkoho hure shiamam meshine ruwene. / eyaikopuntekpa kor nea menoko / eimekine ae ruwe ne / Ishimne ike horkeu kamui ka / nupuri kor kamui ka utura hine / ekimne hikusu atura hine / yukopashno⁹² shitu shitu keseta / yuk an ruwene. ne rok kamui / utar yuk kesampa kusu inne topa / apashte⁹³ shiri ene ani -- / topa atpata iwaposu inkara / topa atpa ehoyupu sekot terke yan / sekoro hawean koro ene terekehineno / yuk utat terke

⁸⁸ yaetaye satcep 「[雅] 魚。参考 yaetay ヤエタイエ は枕ことばのようなもの。このように言うことによって韻律が整う」【沙流辞典】p.834。

⁸⁹ 原ノートには eime とだけ書かれているが、これは聞く際に単語の末尾の k を聞きそこなったか、書き忘れたのではないだろうか。実際に二度目に出てくる際には eimek となっているので、ここでもそのように訂正して示すこととする。

⁹⁰ 原ノートでは、上の余白に「kamui uwepekere このイツモ半黒ノメシ 俺メシノヲデXズレモナクノ神ノメシガノソーデ、モアルカト」との書き込みがある。

⁹¹ 原ノートでは、この上に「マダタキテ」との書き込みがある。

⁹² 原ノートでは、この上に「ソコカラ鹿ハセルトマツスグニ川ヘ下リルトカイフヤウナリ」との書き込みがある。また、この左の余白に「鹿ガタクサンノアルノshikumaノノコトノ細イ長イノオネカラノpashte スル」との書き込みがある。

⁹³ 原ノートでは、この上に「ニゲハセル」との書き込みがある。

topanoshikita / iwapos⁹⁴ inkar an ma nenohawean. / “sekot terke yan sekor eki yan!” / sekor hawean
ma kusu oyachiki / kamuyutar omken katuhu ne rok / oka. kusu shine noya nit⁹⁵ akai⁹⁶

【現代表記・対訳】

- 0301 su or un a=osura orowano suy eunno inkar hine oka hi kusu
鍋へとそれを投げ入れ、それからまだ [他の者たちが] そちらの方を見ているので
- 0302 sikihⁱ a=ewatte sikcupucupu rapokike ta
その目に私は息を吹きかけ、[その者たちが] 目をばちばちしているその間に
- 0303 suy su sikno kane emkoho retar emkoho hure siamam mesi ne ruwe ne.
また鍋が一杯になるほど、半分は白く、半分は紅い米の飯になるのだ。
- 0304 eyaykopuntek pa kor nea menoko eimek hⁱne a=e ruwe ne.
皆がそのことに喜びながら、その娘が配り私たちは食べるのだ。
- 0305 isimne hⁱke horkew kamuy ka nupuri kor kamuy ka utura hine⁹⁷
翌朝にオオカミのカムイとクマのカムイも一緒に
- 0306 ekimne hi kusu a=tura hine
山猟に行くために私が引き連れて、
- 0307 yuk opasno situ situ kese ta yuk an ruwe ne.
シカがそこを走るところの尾根、尾根の末端にシカがいるのだ。
- 0308 nerok kamuy utar yuk ksanpa kusu inne topa a=paste siri ene an hⁱ:
そのカムイたちがシカを追いに大きな群れを走らせる様子がこのようである――
- 0309 topa atpa ta Iwaposoinkar
群れの先頭でイワポソインカラが
- 0310 “topa atpa ehoyupu se⁹⁸ korⁱ terke yan”
「群れの先頭を走り、背負って跳ねてくれ」
- 0311 sekor hawean kor ene terke hi neno yuk utarⁱ terke
と言いながら、そのように跳ねているのと同じようにシカたちが跳ねる。
- 0312 topa noski ta Iwaposoinkar an w^a neno hawean:

⁹⁴ 原ノートでは、左の余白に「noshkiketa／ニモソーキル」との書き込みがある。

⁹⁵ 原ノートでは、この下に「一筋ノ矢」との書き込みがある。

⁹⁶ 原ノートでは、この下に「折ル／=akaye」との書き込みがある。

⁹⁷ utura hine 「相伴つて」【久保寺辞典稿】 p.363。

⁹⁸ 人称接辞の i=がついて「私を背負って」となりそうな気がするが、もう一つの物語でもこのイワポソインカラはこれと同じ言い方をしている。

群れの中ほどにイワボソインカラがいて、同じように言う――

0313 “se kor_ terke yan se kor iki yan!”

「背負って跳ねてくれ、背負ってそうしてくれ！」

0314 sekor hawean w_a kusu oyaciki kamuy utar omken katuhu ne rokoka.

と言うので、なるほどカムイたちが獵で獲物がとれない様子であったのであった。

0315 kusu sine noya nit a=kaytektek hine

なので一本のヨモギの棒を私は折って折って

p.4

【原ノート翻刻】

tektek hine topa atpa ehoyupuwa / iwaposoinkar shiki ashiri kootke / iwan poknamoshiri akooterekere / orowano rap wa an yuk achotcha aine / topa noshiki ehoyupu kamiashi sui / noya ani shikihi aotke iwan pokna / moshiri akooterekewene / orowano rappe achotcha aine / opitta araike shitu kesh ta yuk raichep / ikiri⁹⁹ anine nerokkamuiutar orota / rap hine tekorumpe aaruke / iri shiri anukat tek kor kotchaot / ranan hine ekimne rukaun / hotku chikuni kata anan hine / shikinashutunkunne yaikara anine / ananakusu orota nerok kamui utar / poro yuk shike ki hine iwak ariki / ene hawe oka koro iwakpahe¹⁰⁰ / nep kamuye ikaopiuki kusu keraipo / tane shiknu nemanup aki etokush / sekor hawe oka koro sap hine / ichoropokke kush wa hi kusu / hoshki san ike sapaha kashi

【現代表記・対訳】

0401 topa atpa ehoyupu wa(?)¹⁰¹ Iwaposoinkar siki a=sirkootke

群れの先頭を [イワボソインカラが] 走って、イワボソインカラの眼を私は激しく突き、

0402 iwan pokna mosir a=kooterkere¹⁰².

六重の地底の世界に私は踏み落とす。

0403 orowano rap wa an yuk a=cotca ayne topa noski ehoyupu kamiasi

それから下りてくるシカを私は射たあげくに、群れの真ん中で走る魔物を

0404 suy noya ani sikihi a=otke iwan pokna mosir a=kooterke ruwe ne.

⁹⁹ 原ノートでは、この左の余白に「山ニ／ナッテル」との書き込みがある。

¹⁰⁰ 原ノートでは、この右の余白に「カヘッテクルノ？」との書き込みがある。

¹⁰¹ この wa が入ると主語がころころ変わることになり、やや不自然であるかもしれない。2行下でも topa noski ehoyupu kamiasi とあり、ここでも topa atpa ehoyupu Iwaposoinkar として良さそうに思われる。

¹⁰² kooterke で「…を～に踏む」になるはずで、末尾の-re が余計かも知れない。下で二度目に言っている箇所では-re をつけていない。

またヨモギでその目を私は突き、六重の地底の世界へと私は踏み落とすのだ。

- 0405 orowano rap pe a=cotca ayne opitta a=rayke
それから下りてくるもの [シカ] を私は射て、すべて殺す。
- 0406 situ kes ta yuk raycep ikiri an h_ine
尾根の下手にシカの死骸が積み重なって、
- 0407 nerok kamuy utar oro ta rap hine
そのカムイたち [オオカミとクマのカムイ] がそこに下りてきて、
- 0408 tekorunpe airuke(ayruke?)¹⁰³ iri siri a=nukar_ tek kor
小手打ち叩き、皮剥ぎをしている様子を私はちょっと見ながら
- 0409 kotcaot ran=an hine ekimne ru ka un hotku cikuni ka ta an=an hine
先に私は下りてきて、山獺に行く道の上へ傾いている木の上にいるようにして、
- 0410 sikinasutunkur_¹⁰⁴ ne yaykar=an h_ine an=an akusu
アオダイショウに私は姿を変えていたところ、
- 0411 oro ta nerok kamuy utar poro yuk sike ki hine iwak arki
そこにそのカムイたちが大きなシカの荷物を作って帰ってきて
- 0412 ene haweoka kor iwak pa he:
このように言いながら帰ってくるのか――
- 0413 “nep kamuye i=kaopiwki kuskeraypo
「何のカムイが私たちを助けてくれるおかげで、
- 0414 tane siknu ne manu p a=ki etokus”
今は助かるということ私たちはすることになるのか」
- 0415 sekor haweoka kor sap hine i=corpokke kus wa hi kusu¹⁰⁵
と言いながら山を下りて、私の下を通るので
- 0416 hoski san h_ike sapaha kasi a=ociwociw.
先に下りてくる方の頭の上を私は突っつき突っつきする。

¹⁰³ Kemakarip / atureshipo / sancha otta / mina kane / tekorunpe airuke 「朱の輪姫の 我が妹 口もとに 笑をたたえ 小手うちたたいて」【ユーカラ集4】 p.310。「airu「音する」airuke「音をだす」小手うちたたきて喜ぶさま」【ユーカラ集4】 p.194。

¹⁰⁴ sikinasutunkur 「アオダイショウ」【動物編】 p.224。

¹⁰⁵ wa hi kusu の用例は ekuskonna owotciw hine mom wa hi kusu a=kesanpa yakka 「(妹が) 急に水に落ちて流されてしまったのです。追いかけたけれど」【上田トシ民話1】 p.128にあるが、他には特に見あたらない。

【原ノート翻刻】

a-ochiuochiu¹⁰⁶ inukanrokpe / humse tura shikekoopmekpa¹⁰⁷ / tekine kirahine sap unita sap / hine orowano ene aeyaikopuntek / ap¹⁰⁸ hemanda kamuye ene eramkoiki / shiri ani an sekoro ramu oka / kusu¹⁰⁹ kohepututpawa okai kusu / ramuanani shikeheka¹¹⁰ nerok / yuk ka opitta puyarpokun / asapte hine orowa ramu anani / nupuri kor kamui ka horokeu kamui / ka iramno puyar kari ainkare / ruwene akusu nerok yukka / shikeheka oka ruwe nukarpawa / tekorumpe airukepa koro nerok / yuk ri¹¹¹ ruwene hine orowano / kamui¹¹² kotan hepuni ruwene / orowano hemanda kamui / an kusu shiknu an shiri ene / ani an sekoro ramu oka kor'oka / hikusu ashinuma nehi / aeramuokaire¹¹³ ruwene akusu / yayemaka¹¹⁴ kayairuke oroyachiki

【現代表記・対訳】

- 0501 i=nukar_rok pe humse tura sike koompekpa tek h_ine kira hine sap uni ta sap hine
私を見た者は、掛け声とともに荷物を捨てて逃げて山を下り、家へと山を下りて
- 0502 orowano ene a=eyaykopuntek a p
それから、そのように私はそのことを喜んだが、
- 0503 <hemanta kamuye ene eramkoyki siri an h_i an?>
<何のカムイがそのように悪戯をする様子なのか>
- 0504 sekor ramuoka kusu kohepututpa wa oka h_i kusu
と [オオカミとクマのカムイが] 思うのでふくれっ面をしているので
- 0505 orowa ramuan=an h_i sikehe ka nerok yuk ka opitta puyar pok un a=sapte hine
それから私は念術で、その荷物も、それらのシカも全て神窓の下に私は下ろしてきて、
- 0506 ramuan=an h_i nupuri kor kamuy ka horkew kamuy ka

¹⁰⁶ この行の左に「アタマへ」との書き込みがある。

¹⁰⁷ 先に kop と書いて、p を消して koop となるように書き継いだ形跡がある。この行の上へと線を引いて「シマツテキタモノノヲ仰イデ／ステニゲタ」との書き込みがある。

¹⁰⁸ この行と次の行の左に「ソソナイタヅラ／シタダベナ」との書き込みがある。

¹⁰⁹ この行と次の行の左に「キモヤケテ／ロトガラシテ／ル」との書き込みがある。

¹¹⁰ この単語の上に「ニモツ」との書き込みがある。

¹¹¹ この単語の上に「ハグ」との書き込みがある。

¹¹² この行の左に「ソレカラ／ヨクナッタ」との書き込みがある。

¹¹³ この行の左に「ワカラセタ」との書き込みがある。

¹¹⁴ この行の下に「オヤオヤ ソーイフ人／チカクニキタノワカラズニ キタモノカナア」との書き込みがある。

私は念術でクマのカムイにもオオカミのカムイにも

0507 iramno puyar kari a=inkare ruwe ne akusu

一緒に窓を通して見させるのであったところ、

0508 nerok yuk ka sikehe ka oka ruwe nukar pa wa tekorumpe airuke (ayruke?) pa kor

それらのシカも荷物もあることを [オオカミとクマは] 見て、手をうち叩きながら

0509 nerok yuk ri ruwe ne hine orowano kamuy kotan hepuni ruwe ne. orowano

それらのシカの皮を剥ぐのであって、それからカムイの村は再興するのだ。それから、

0510 <hemanta kamuy an kusu siknu=an siri ene an h_i an?>

<何のカムイがいるとてこのように我々が生き延びるのか>

0511 sekor ramuoka kor oka hi kusu

と思っているのだ

0512 asinuma ne hi a=eramukayre ruwe ne akusu yayemakaka yayruke (?)¹¹⁵

私であることを私は分からせたところ、身体をのけぞらせて驚き (?),

p.6

【原ノート翻刻】

ene an pasekamui isoike heta / anaanike neun ne yaka¹¹⁶ / aeramishikari sekor hawe oka / kor
orowano anakne ainu / tonoto ainu inau ariki koro / hoshikino aitak inau imek / aikore wa aeyaikamui
nere / ruwene / upashchironnup hawean

【現代表記・対訳】

0601 “oroyaciki enean pase kamuy i=soykehe ta an aan h_ike

「何とまあそのように位の重いカムイが私たちの家の外にいたのであったことを、

0602 neun ne yakka a=eramiskari”

¹¹⁵ 【神話集成 1】 p.116 および p.118 の平賀サダモさんに同じ表現があり、そこでは yayemaka kayauyruke となっており、「身体を船の帆のようにのけぞらせながら」と訳され、yay-emaka kaya-uyruke と分解されているが、果たしてこれで正しいかは検討の余地があるだろうか。【平取アーカイブ】には鍋沢ねぶき「ウエペケレ『オタサムンクル』オタサムの人 1」675-676 行目において、konto ukoemakaroski pekor iki pa wa utomkayayruke(?) pekor iki pa ayne 「[その若者たちが] 今度は立ちすくんだような様子で、互いに折り重なるようにして」という箇所があり、音を聞く限りは聞き取りは正しいように思われる。前掲の【神話集成 1】の 2 箇所においてもカタカナでは「ヤイルケ」と書かれており、実際の音声を聞く限りでも yayruke よりは yayruke と発音されているように思われる。

¹¹⁶ この行の右に「ドーシテカ」との書き込みがある。

どうにも分からなかった」

- 0603 **sekor haweoka kor orowano anakne aynu tonoto aynu inaw arki kor**
 と言いながら、それからは人間の酒や人間のイナウが来ると
- 0604 **hoskino a=i=tak inaw imek a=i=kore wa a=eyaykamuyneru ruwe ne**
 まず私を招いてイナウの分け前を私にくれて、私はそれで自分をカムイとしているのだと
- 0605 **upascironnup hawean.**
 エゾイタチ（雪狐）が話す。

文献略号

【沙流辞典】：田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。

【動物篇】：知里真志保（1976[1953-1962]）『知里真志保著作集別巻1——分類アイヌ語辞典植物編・動物編』平凡社。

【音声資料】：田村すず子（1984-1999）『アイヌ語音声資料1～12』（全12巻）、早稲田大学語学教育研究所。

【久保寺辞典稿】：久保寺逸彦（2020[1992]）『アイヌ語・日本語辞典稿』（久保寺逸彦著作集④）草風館。

【ユーカラ集】：金成マツ筆録、金田一京助訳注（1959-1975）『ユーカラ集 I～IX』（全9巻）三省堂。

【上田トシ民話】：アイヌ民族博物館編（2015）『上田トシの民話1～3』（全3巻）、アイヌ民族博物館。

【神話集成】：萱野茂（1998）『萱野茂のアイヌ神話集成I～X』（全10巻）ビクターエンタテインメント。

【平取アーカイブ】

（ふじた まもる・慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部）

Aynu Oral Text Performed by NABESAWA Kopoanu and Written Down by
KINDAICHI Kyosuke on Ermine (*upas cironnup*)

FUJITA, Mamoru

Summary:

This article publishes in an accessible form the prose tale “upas cironnup” (ermine or white weasel) performed in 1919 and 1925 by NABESAWA Kopoanu and written down by KINDAICHI Kyosuke. The main protagonist is this small animal known in Japanese as “okojo” or “ezo itachi,” who becomes aware of the famine in the human world around him where both *kamuy* (deities) and *aynu* (humans) live, and sets out to solve the problem. These two stories are related to the prose tale written down by KANNARI Matsu for KINDAICHI Kyosuke, published in Fujita (2024). While the former stories come from the Saru region, the latter comes from the Horobetsu region, which offers us an interesting opportunity to compare and examine the regional differences and commonalities. In the introductory section, we lay out the philological details of the text and possible interpretations of the stories, followed by an outline of the stories in Japanese. After some remarks on the Aynu orthography employed here, we present the main part of this article, which is a page-by-page transcription of the original notebook, followed by a modified text using contemporary Aynu orthography and a Japanese translation.